

土俗談語

特別

又6

9339

1

960 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5



土谷談話

土國子と、我々の間に、
 様のお物事、おまじ、
 こころ、おまじ、おまじ、
 覺帳の、おまじ、
 所、おまじ、
 おまじ、おまじ、
 句、おまじ、
 おまじ、おまじ、
 おまじ、おまじ、
 せん、おまじ、
 せん、おまじ、



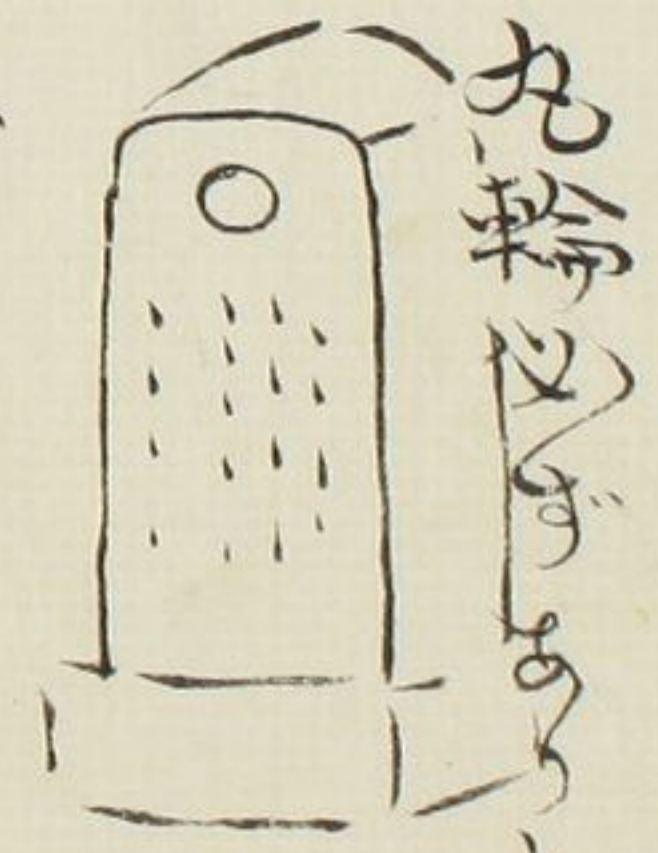
Handwritten text in cursive script, likely a letter or a section of a book. The text is written in black ink on aged paper.

家書

Main body of handwritten text in cursive script, continuing the letter or section from the previous page. The text is dense and fills most of the page.

伊豆伊東 須美の妙智寺に天狗の書なるといふ異本と云ふの
書あり

津前 秋の濱の暮るまに部山 細き丸輪の書ありと云ふ
中らに云ふと云ふと云ふ



又曰く 津中 禰者即大向村の

墓に必ず屋根あり板根も屋根あり文字に合ふと云ふ

土の砂をちまふゆへに伏見の端より甲斐の海に接する

ところが佛寺の縁のよきありと云ふ 津前 須美 徳寺 類と云ふ

に云ふありと云ふ 土製と云ふ 形と云ふ ありと云ふ ありと云ふ

ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ

建てかゝるを云ふと云ふ 津の築地と云ふ

ありと云ふ 三春の物と云ふ 木製と云ふ 造作の物ありと云ふ 味の色と云ふ

の福社の祭りの物ありと云ふ 三春の物と云ふ 同形と云ふ ありと云ふ

これと云ふと云ふ

ありと云ふ 即 館腰村の地蔵あり 又 竹駒大明神と云ふ

ありと云ふ 祈願者 油揚 柳 ありと云ふ 土製の 猪と云ふ

ありと云ふ 下野國河内郡塚山村に二月卯午スミスガリといふ食むを製し

神々共く祀りありと云ふ ガリといふと云ふ 大根をすげり 麩の頭と云ふ

スミスガリといふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ

ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ ありと云ふ

駿河静室の葬式の列順

- 一 位牌 (親屬持参)
- 二 北園子
- 三 水
- 四 棺

葬式の供をすゝ女は白衣を頭よりかぶり袖より髪を敷して歩む
 又葬式の足湯をもめずの新製の履を著し供したるが衣敷を増すも
 下駄あるものかき表なをきり見世の符帳

大へ△×又△△△△△
ダイ ヤマ ムツゴ ミズリ ヌケ キウ

△ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ

大 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ

△ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ
 △ 一ツニツ合せタリ
 × 一ツニツ合せタリ

大塚より四里左小島村と云村と云嫁れの時妙好妙好の家
 途中子供供持来よこすおびつて過ぎす新婦おし燗餅二枚
 ぶくれをせされおびつて過ぎす
 二姑々々香道よと葉の縁縁色を失い
 白くちを隈毎と云くまを云々毎と
 一三三三を云々武蔵玉川を云々九枚毎と云



取後河津山也自然生の大根三ツリといふものありと并テ三ツリを畑
 へ作らるる野大根と云味もよく食すものごと
 備後三次郡也も今も女々あり松脂燗燗を用いたる
 遠め伊井谷村いの谷中我龍潭寺宗良親王の女墓あり無也橋木
 と井戸あり井の先廻の也ち井印の紋これよりちたとの説をいふ
 遠め也もいぬ雷の時刻なる木を虫迷の痛のゆかめいぬをいふ
 但馬岡もいぬ一里程の也燗餅をもち也山名父の跡と云

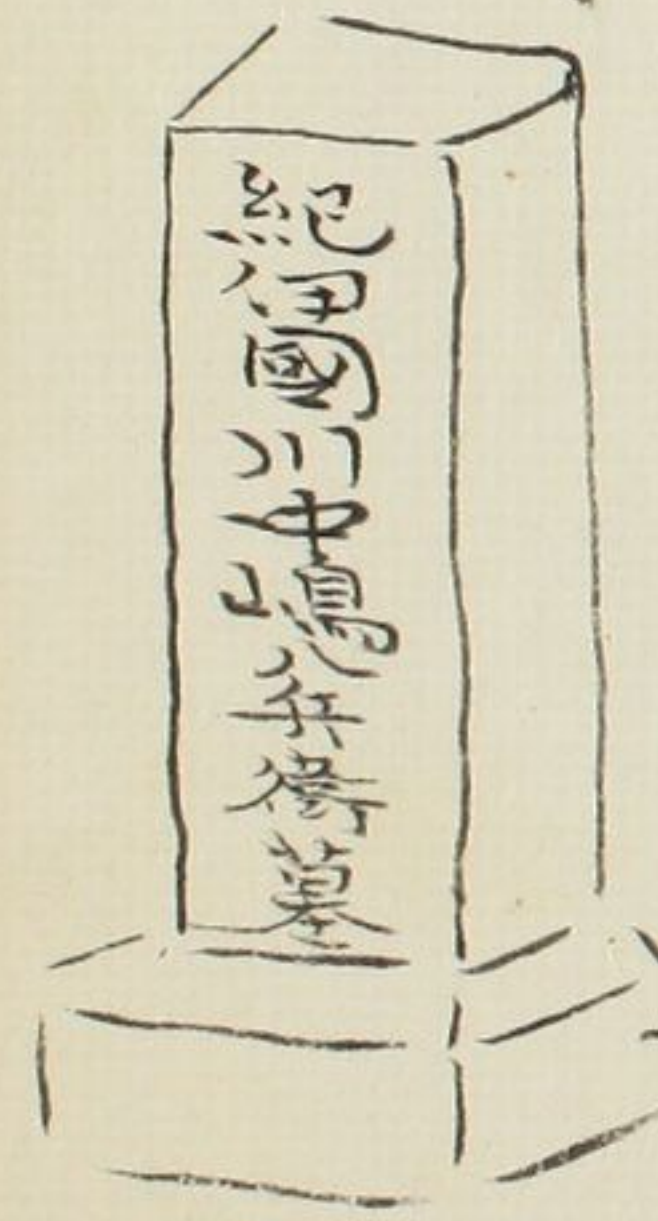
秀吉の爲に水の舟を絶れし時白米を水と見せ流したる一老母
あり歌にすむを昔に井城にびたり其老母の家代々不果妻を生れと
燗米のちり也流るるあり今に見たり甲州新府の城跡彼も黄瀬
川に流るる也昔の長者なるを記す

越前福井より新井の女白米の嵐色の公田を
むくし今田とすし今を帯とすはたをぬき今を

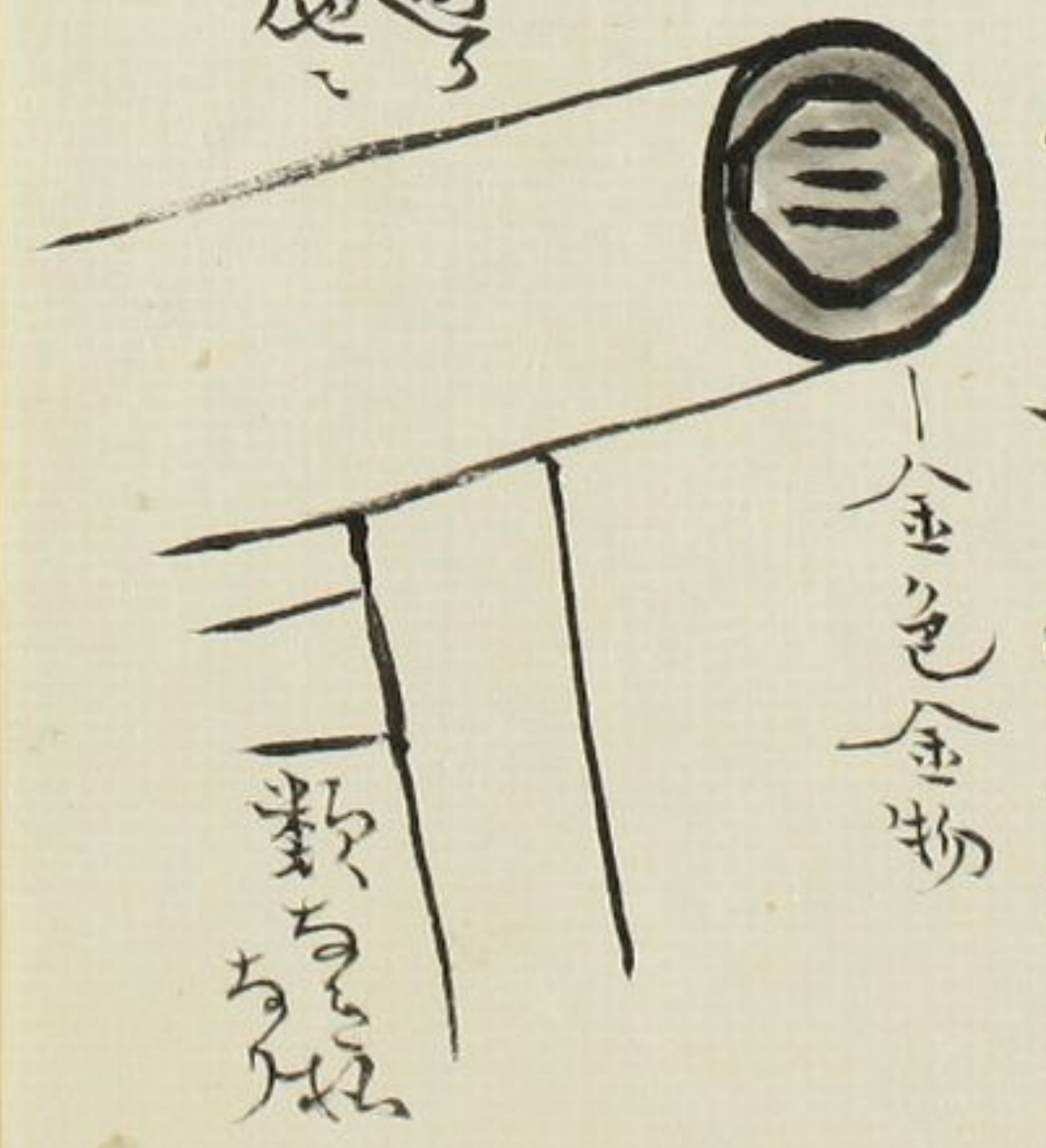
森より五十里余り也川とすはありんより三里余りて
日暮るる深き京丸の川とすは京丸の三町あり森
より米を運ぶ運河一里半ありは
酒はかます川に京丸二村とも女山村の酒造あり
有河はありは川に酒造あり
酒粉をすくはくすは川に酒造あり
酒とらふは川に酒造あり

比叡山に川流るるの女三粒を吞むる中あり
川一川の女ありん川とすは言ふは福崎也
川に川とすは
今津談話中女川の蛇十足載に書きたるは
越後新田の川に蛇十足載に書きたるは

物ありは女木町の西光寺の別院に庚申ありは
この庚申日の前後に蛇十足載に書きたるは
ありは女木町の西光寺の別院に庚申ありは
物ありは女木町の西光寺の別院に庚申ありは
物ありは女木町の西光寺の別院に庚申ありは



武蔵大里郡の平塚村にありし也哉、今津丹がらりてしる也
 西京上かまよ一會也ハ鴨とよし、土製の船と船也
 武蔵郡山崎村の勝の木をツツカゲ又シカノキとよ
 房總の谷田年と午年と、二房の國札所を三十三の
 親のふに五日、未年のふに三日、現年のふに一日、
 父に五日、申に三日、このふに一日、
 新入りの船の中を、
 茶り、
 下は開す。近年、造られた下谷坂、
 金枚の三島林の鳥、
 一 金色金物
 一 敷き



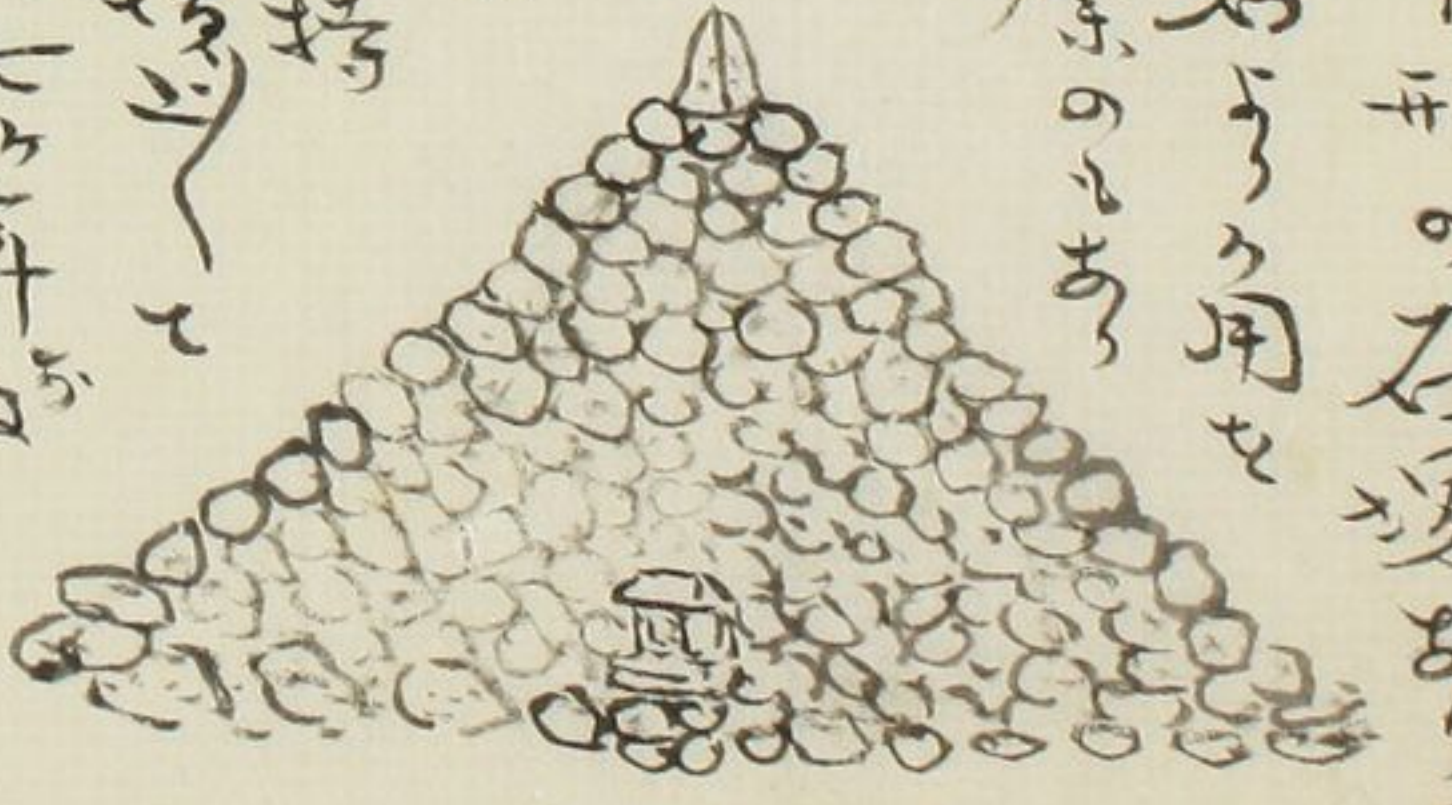
武蔵比企郡川崎村鬼神社、
 月籠を、
 井の茶、
 難、
 夢、
 波、
 の二種、
 月、
 夢、



田舎の
 船



塔の形も高き即深澤村の狂人塚と云ふ。ピラミッド形の石塚あり
 よも高きを計じし。高きは石の半周圍に廿七箇上の石より角を
 計き、五箇余ある石の大サ七十寸ほり。大なるは二尺余のあり
 又力も高きより角より計し、高さあり不規則
 ちぎり四角をちり。金塔形は墳にテ頂上より
 石塔形の自然なるをともなひ、石塔を造つた者
 石塔の造らるるのありて、父惣助の造らるるなり
 あらざる者、しがまゝ一人の娘を造らるるなり
 あらざるは、石の造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 四十年前、狂人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 狂人の造らるるのありて、狂人を造らるるなり
 娘の造らるる大宮の狂人を造らるるなり
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる



塔の形も高き即深澤村の狂人塚と云ふ。ピラミッド形の石塚あり
 よも高きを計じし。高きは石の半周圍に廿七箇上の石より角を
 計き、五箇余ある石の大サ七十寸ほり。大なるは二尺余のあり
 又力も高きより角より計し、高さあり不規則
 ちぎり四角をちり。金塔形は墳にテ頂上より
 石塔形の自然なるをともなひ、石塔を造つた者
 石塔の造らるるのありて、父惣助の造らるるなり
 あらざる者、しがまゝ一人の娘を造らるるなり
 あらざるは、石の造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 四十年前、狂人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 狂人の造らるるのありて、狂人を造らるるなり
 娘の造らるる大宮の狂人を造らるるなり
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる



狂人の造らるるのありて、狂人を造らるるなり
 娘の造らるる大宮の狂人を造らるるなり
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる

狂人の造らるるのありて、狂人を造らるるなり
 娘の造らるる大宮の狂人を造らるるなり
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる
 あら狂人の一人を造らるるを恨み狂人し、石を造らるる

此の御祭は古より此の土地に神を祀る事の有りと
 申す事と云はれり。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて

此の御祭は古より此の土地に神を祀る事の有りと
 申す事と云はれり。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて

此の御祭は古より此の土地に神を祀る事の有りと
 申す事と云はれり。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて
 此の地に降りて居り。其の神は天照大神に由りて

天照
 三ツ木



前々同様に竹を長短二本一節に切り
 各竹の節を懸ひ分て支えしと最長を
 貫く行くは竹の節を
 竹を貫く火燭を
 七根もとさし結い
 小形つたあねね
 如節々繩を集め
 二節に其の中
 竹をたし
 其の節の
 竹を先
 竹の節

火中に入れ火燭ふし高へるを見て子が上りて

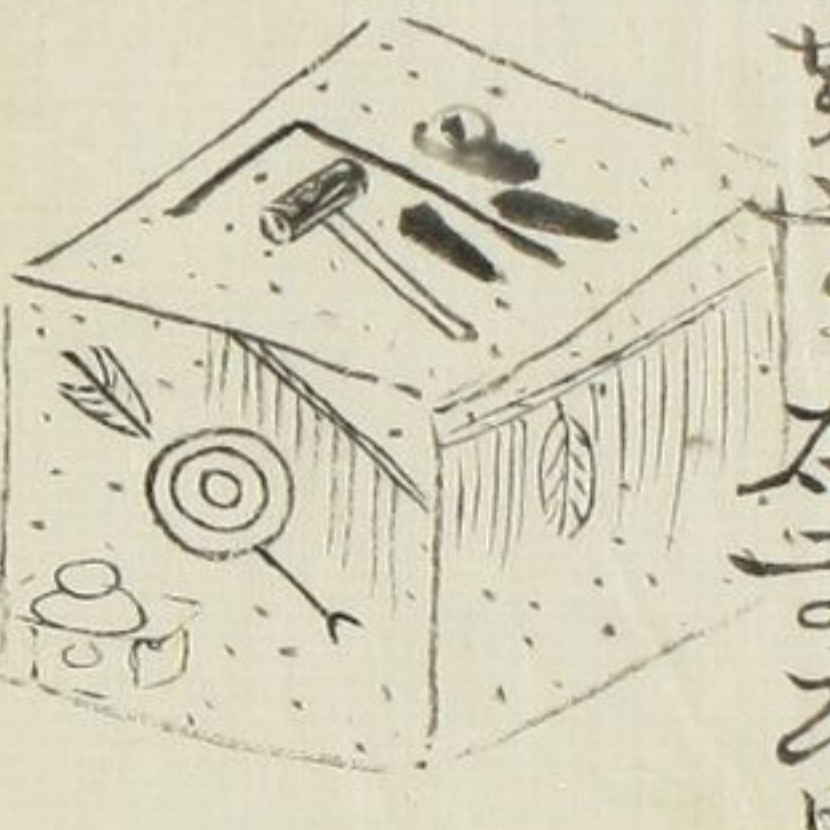
竹の節を
 結い
 竹の節



竹の節の図



日の上の...の...
 の交...
 ...
 ...
 ...



...の...
 ...の...
 ...

...

...
 ...
 ...

...

...
 ...
 ...

...
 ...



...

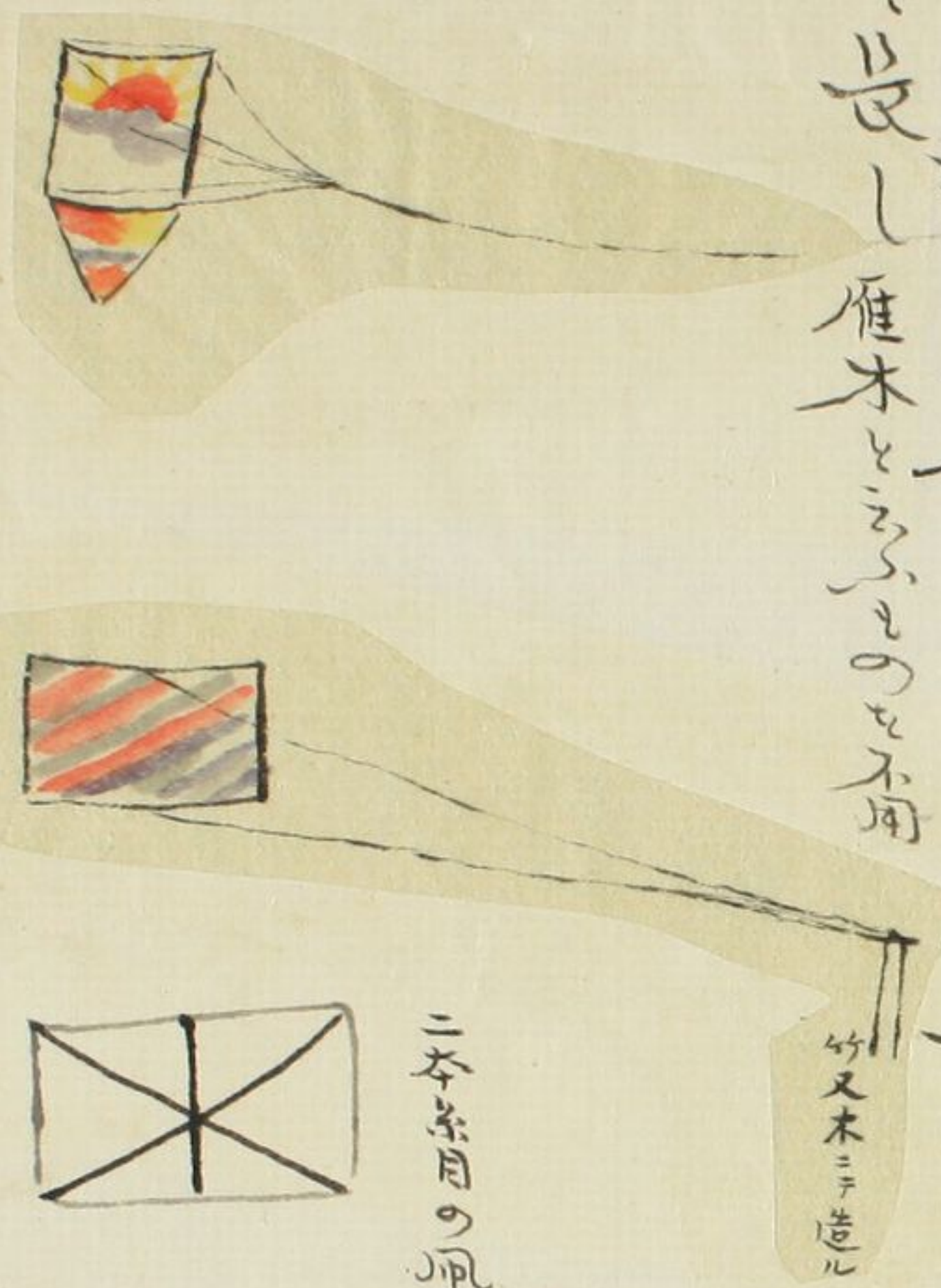
中のよもぎをよもぎの餅に引かす
 餅の根もとを新を巻かす
 一月常々餅をよもぎの根もとを新を巻かす
 煙又米遠石のよもぎの根もとを新を巻かす
 見地きし三時迄よもぎの根もとを新を巻かす



舟の浦より舟の根もとを新を巻かす

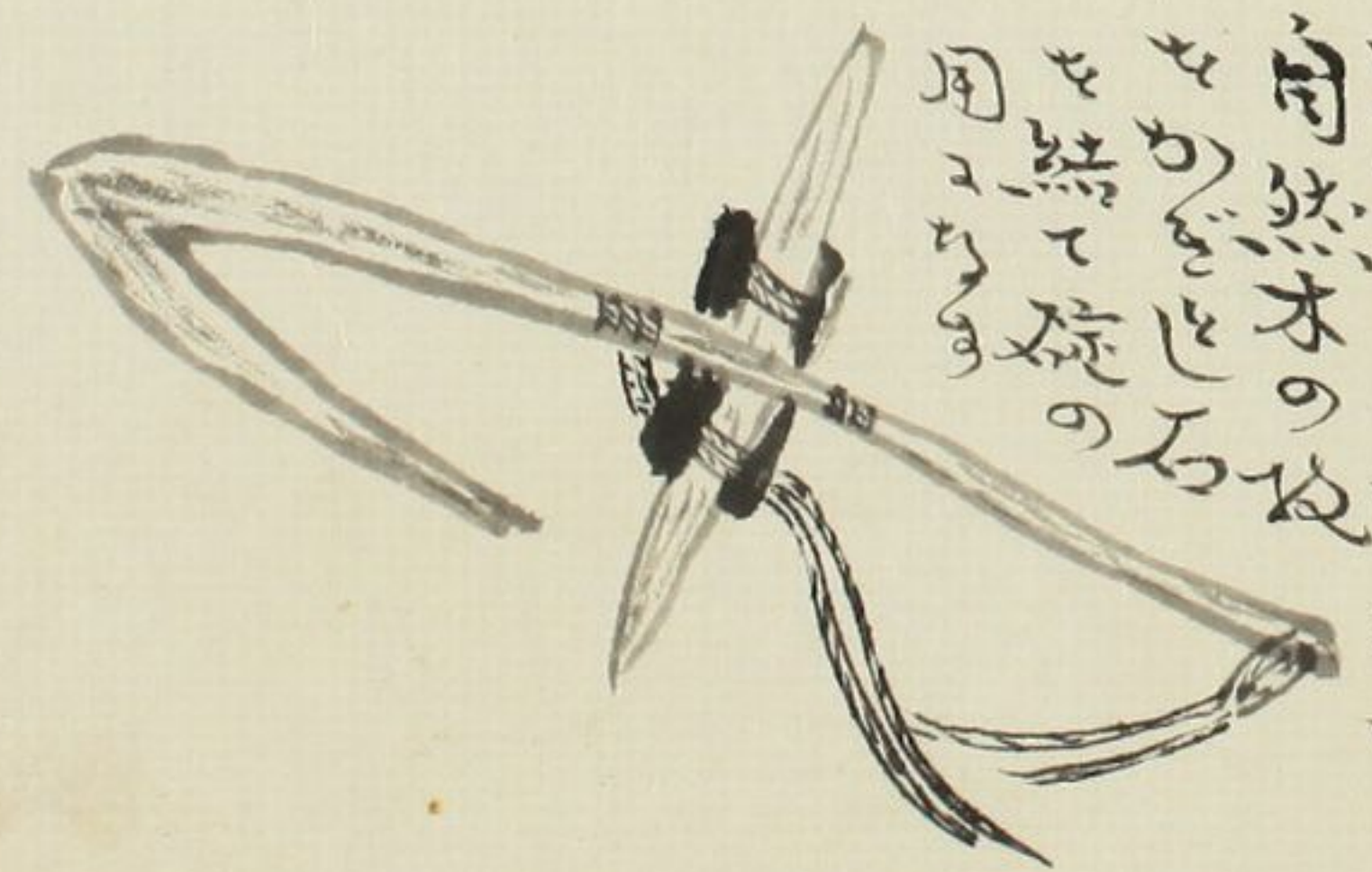
舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす

舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす



二本旗西の船の旗

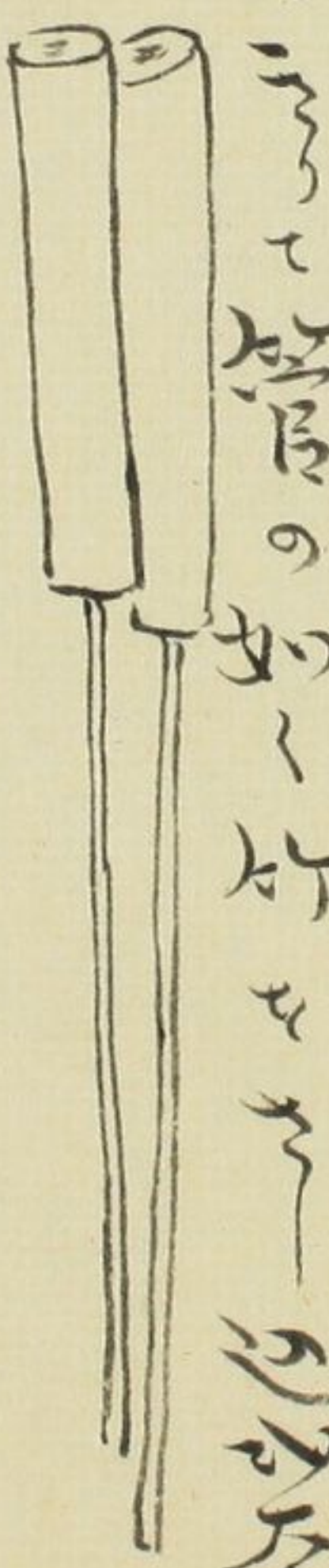
舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす



舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす
 舟の根もとを新を巻かす

又ハボトクモ 榎木をこきりて 管の如く竹々きりて 以て 神々ノ供す 是れ一月の 高き草也
 又ハ月の中の 山初と云ふ 物ノ初と云ふ 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ
 白木を 削れ 榎木も 削れ ナラマス トと云ふ 物也
 又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ
 又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ

又ハボトクモ 榎木をこきりて 管の如く竹々きりて 以て 神々ノ供す 是れ一月の 高き草也
 又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ
 又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ



又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ
 又ハ月の中 何れも 草也 此ノ草 樹木ノ根も 一人の草に 似たり
 ナルベーカー ナルメイカ ナラ子トイフト ナターカマ

なまめの大根をきりて 粥の代りにす
三月三日は梅の枝と 萩の花と 萩の川
の萩をきりてすす 梅とあまぎをる 萩の川
ぬれぬ

又三月の十日は 平たいちきりて 萩の川
し 萩の川と 萩をきりて 萩の川
地内もある 萩の川と 萩の川
萩の川と 萩の川と 萩の川

萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と

し 萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と
萩の川と 萩の川と 萩の川と

おの大神を為す神おの神のつくま

大神宮 高江の神社 又博美 大江 小教長

又大火又火をふるまひしおののわしののすまを
持いあるし松をふるまひし

又長岡の火祭りとくまし其のく大火を燃し火の中を
幸増を大増をふるまひし

又房の谷嫁の日のまきおやま嫁ある家のまき
まきをふるまひし又おの桶をふるまひし
おのまきを見おのし見ぬ松をふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし

又早敷の時祭神社のまたじ也の水を祭のまきしつて神
又又符のまきしおのまきをふるまひしこのまき一本のまき
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし

江戸以下三度巻の三谷護房が家に入石井常蔵の蘭

東京下谷坂本町の野照神社とある火を納て虫連の梅を新幹社
の縁の下に火を焚きしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし
おのまきをふるまひしおのまきをふるまひし

名そのれを二枚りと信ず

大馬馬通るふくはるの通る十月十九日
根を賣見せ多くは梅木の多くも
姑見の菊の相場一坪何程と賣相場を極め
とすと地味菊の東講の仕立ものを賣る
たる者バツリと叫り大根を繩で繋ぎ
かきつけんじと又不意の類先くも
張る所は濱邊とふをみる人のほし
平九日とて秋佛の信將を濱邊
其のまゝ葉をたぬは秋菊の
酒食者を食精進をゆるめす
信將を濱へも命めり

駿州元音京池七日十三日
今秋来の人通る少なるゆ
同節もつて七日の三つは
房が北条館に即す河と
七月十三日佛殿に
供ずる造花用の
まて牡丹花菊の花を
見せせんともいふ
せーとて花を賣り
葉の菊の葉を賣り
色紙を無造作に



造花縮図

まて牡丹花菊の花を
見せせんともいふ
せーとて花を賣り
葉の菊の葉を賣り
色紙を無造作に

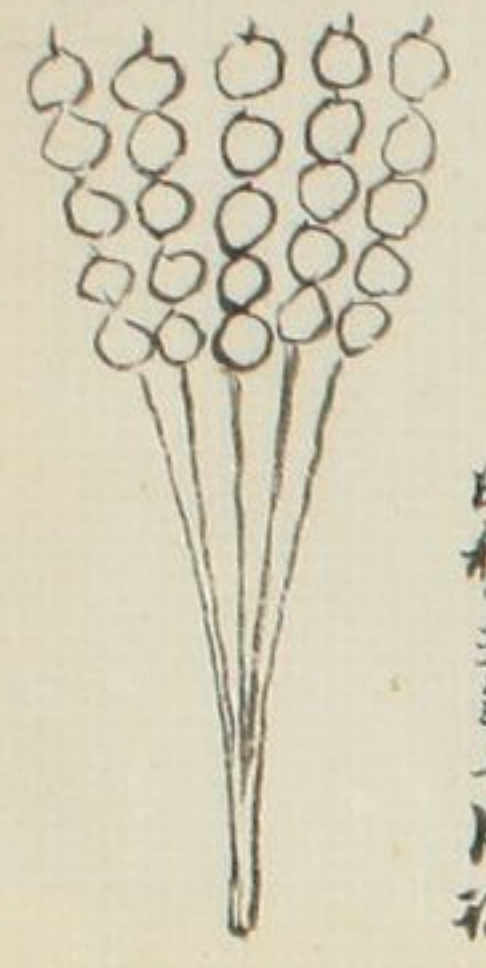


大湯國 肝屬郡 拾遺村 辺りの片右畑のふち青桐と植
付ありて農家は桐の皮を糸に繩の代用をなす莫仕る
木をとりて木口をたたくは木皮をぬくは一般に糸を
繩に用ひ月も又籠に造る。

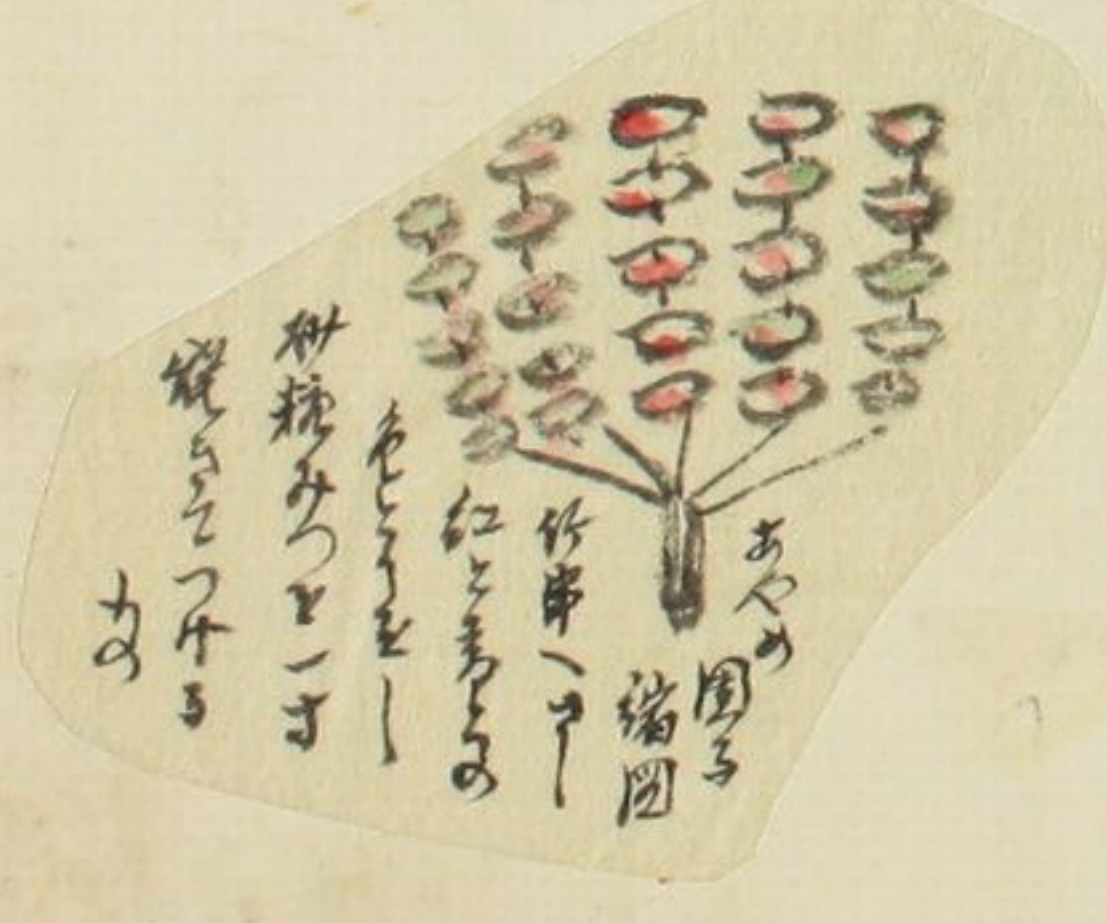
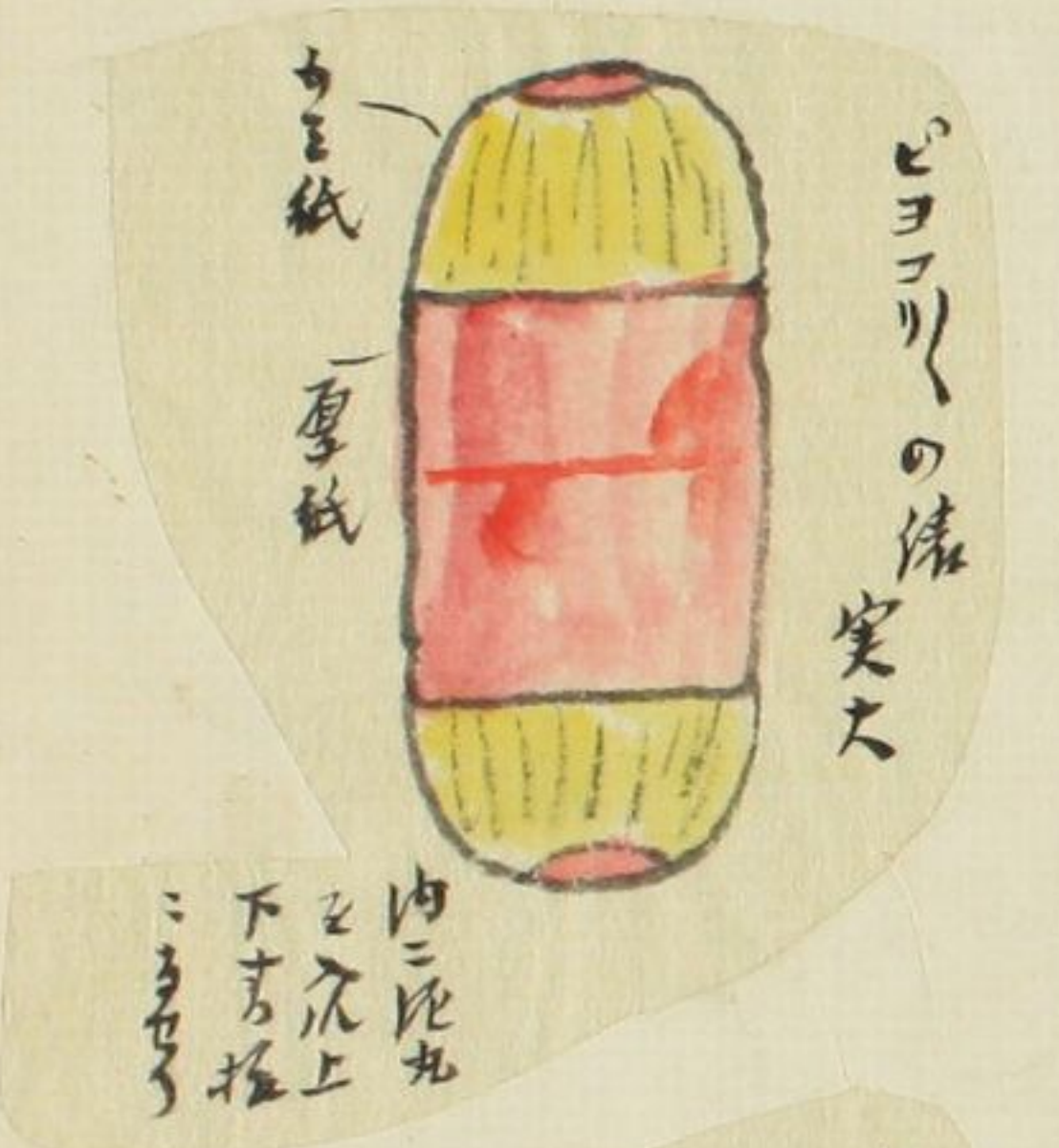
日向大湯地を越えし藤原のやまのふも葉をもちて家内
菜漬の香めをちし必ず給仕女にこれと葉をよめはく女
人ふす。める朝飯前梅干をちきぎり或は茶代をき
めぬ。ちきぎりはちきぎりやちきぎり
向方の油をゆかりをきり有るなるはちきぎり人とも
れんがあはれをもちて今も同様に
のことゆかりをもちて車輪形おめの葉を油をきり丸
毎の紋つきの葉をもち

端をくれちん餅を強飯の粒をつちき餅を甲の餅と
餅は餅場の葉をもちてちきぎり葉をきり丸餅をもち
大坂をちきぎりとちきぎりの葉をもちて丸餅をもち
ちきぎりの餅をもちて丸餅をもち
縁日為人もちて今も絶んとして僅かあるものちきぎりの餅をもち
ちきぎりの餅をもちて丸餅をもち

竹居五伊賀餅は米粉と糖を包み
形は大福の黄と紅とを彩り上は
飯をゆきちきぎりの形をもち
餅をもちて丸餅をもち

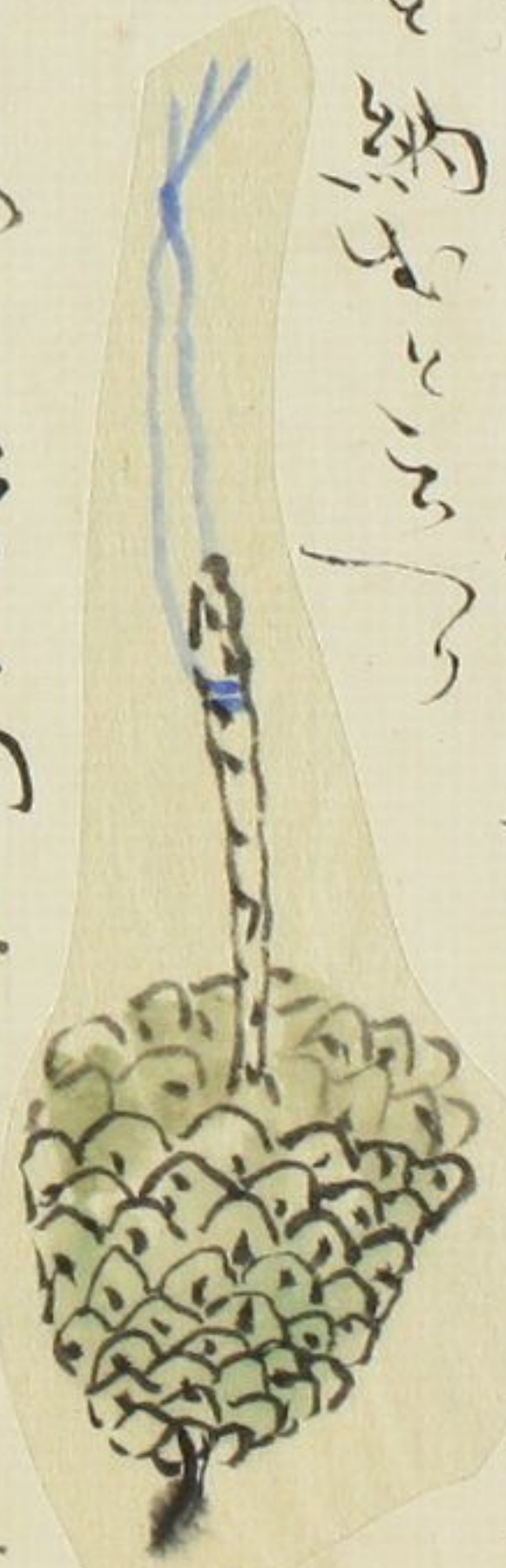


田村五幸十月祀



ちきぎり 餅
竹居、伊賀
紅と黄の
餅をもちて丸餅をもち

中野の停車場より北の方面へ進む途程中細川中筋の河をくぐり
 村の脇を流す河が二社の左右の柱に細く又繩の帯を下げて
 一の威節と云ふ懸つてあり
 大子八幡社と云ふ小社あり三崎大明神と云ふ懸れあり
 社と云ふ納めし秋の木を著したるを改りしもの中官の切
 大子八幡社の内は松毬を
 ずかむをかけたる如きもの
 つしあり中野の河は供也のものと云ふ二河の中
 としてあり松の毬を
 東京の人力車を走らせ提灯を父が手にかけて走れど九
 辺まで提灯を車の飛捧へはさまて走らせ東京の人力車
 走らせ二人乗を合箱といひ客を運らし提灯を番板と云ふ



後を觀するに旅人の知れる如く府下第一の繁華の地を
 人足の絶つ時を東京の繁華を知らし材料の多きを
 宗教上の各處に賣しても流るる多しあるを思ふ左の
 東堂の砂 これに冬旅人の下足もつらなる土砂の板敷に
 入たるをはき集めふらひに成り入れたる者あれが
 多し其の錢と云ふ者も年中雪の深きこればかり
 繁華の者あり其店繁華すといふ客を引くる
 繁華の者あり其店繁華すといふ客を引くる

拾二通りの寺
 病難除 船中安全 安産
 雷除 厄除 船中安全 不淨除 開運

表のれ

病難除 全龍山 御守 滋単寺

慈眼視衆生 福聚海無量 衆怨悉除散 妙音觀世音

れの内部

拾二回しども同一の経語を説いたる可きと交遊し虫涂の劍難
し安きほど同ししえを觀言の妙力に習ふ者の迷途の如
くしる可し中のの可なりとの
第分の札
れまを屋のめれ紙の分の札を
すし

第分殺者經日數所

觀言の命馬 中一社の神馬
馬せし出来ものありしを
をせしるなりし馬を
草を馬の食せしるなりし馬を
米積大黒 歳の石の目撃言
一農田の幸福を記す言

三途川の老女 口中一の頼扶をいせが早驗ありし
場妓を納むに縁慈賞大の作りと東影の世が老女
の手に茶笥を持ち茶笥慈賞大の時代のもの
大詠の延暦十三年に生れ貞觀二年に死せし時代遣の邊り
て笑ふにその老女の迷がやと
療まよしと云ふ
仲見世の豆鳩 仲見世の玩物と云ふは
て勝の上のサカが食むの
錢塚地藏 其心
又錢を借りし
九月九日の菊花 四曆九月九日の觀世
先に供したる菊をわゆるが
菊を供するあり

後山山に病の神として病を治す神あり
 秋山自雲の雄靈神として病を治す神あり
 此の病を治す者として病を治す神あり
 人あり我を療してやると延言元年九月廿日と忌りとせし
 を見れば其日死せしを治す神あり
 信次まき多くし天保二年のまきしが尾加初候病の爲に甚
 病を治す神あり時家次郎の者のすめいより祈願ありし小平愈
 しかば大に後れ神祇官白川家へ祈せし秋山自雲の雄靈
 神の神を贈るしとして自雲の自持と言通し病
 の神を治す神あり今まきしを治す神あり
 下谷の根岸に二股樹とて次小園せし二股の樹あり此の病
 治す神あり此の病を治す神あり根もよくし
 神を治す神あり此の病を治す神あり根もよくし

付て治す神あり此の病を治す神あり根もよくし
 枝を納めつ中の病を治す神あり根もよくし
 根岸の二股樹の樹ぶりとて言通し病を治す神あり
 此の病を治す神あり根もよくし

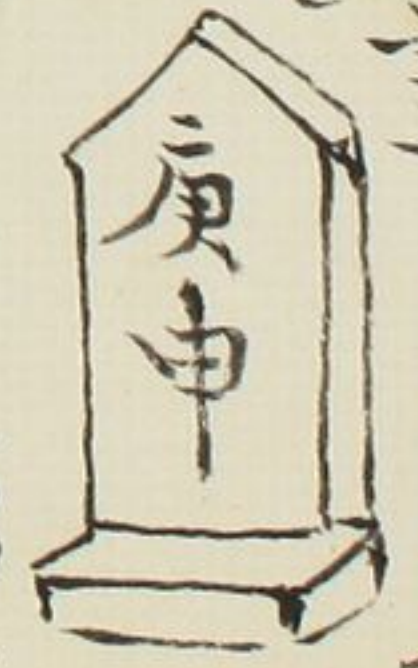
二股
 三國

根の縁や樹の者多し此の病を治す神あり
 縁を思ふとて病を治す神あり根もよくし



春
 納めし
 千歳女

板橋より物置まゝ右へ赤塚大同寺（むらさき道）より神林の神社
 あり庭のぬきたる竹柄杓社内（鎌倉）あり耳の敷地をぬき（納め）
 武蔵の武蔵のりこのりく庚申塔の多し百三十余基を数（たり）元禄
 以よりぬき（り）年（り）も（り）年代（り）の塔の形（り）短形（り）多し



かめ（り）の金石（り）と（り）也（り）つ（り）河豚（り）を（り）食（り）す（り）め（り）金石（り）金石（り）金石（り）と（り）三度（り）留（り）
 食（り）せ（り）か（り）中（り）毒（り）も（り）か（り）ら（り）ぬ（り）と（り）し（り）

東京現今神佛と食物

西の市就身大明神と芋頭、芋栗餅

麻布長谷寺彼岸中の芋（り）でん（り）が（り）く（り）

同金王の甘酒（り）火（り）示（り）

浅草天王の笹團子



田畑 福祿壽の黄金餅

本所 五右衛門の普茶料理

下谷 摩利支天寺の黄色強飯

小石川 沢藏司瑞翁の蕎麦

同 荻野閣覺のこし（り）やく（り）

大久保 鬼王の豆腐

三原 守瑞翁の團子

芝 神明の月（り）ら（り）ち（り）生（り）等（り）

下谷 小野照神社の（り）り（り）豆（り）

同 生駒金比羅社の椎木神社の甘酒と餅

西本願寺の松の餅

目黒 不動の（り）豆（り）餅（り）

一月七種マテ福神餅
 餅ヲ薄クキリタルモノヲ
 雑煮前施餓鬼ハ白ニサシ
 料理今ハ依拠スハ料理ス

黄金餅

コレハ搗キミミ
 出ス強飯



供物ニナス蕎麦門前
 ちぢやアリ

供物
 供物ナリ種物（り）ハ（り）ス（り）ト（り）ス（り）

前（り）同（り）

供物ハ御膳生等ハ記シ紙包ミテ社ヨリ出ス香物ハ紙ニ
 一月ニテハ間食セザル凡ソクヤチニ又山ノ賣ル（り）アリ
 虫造リ治スチスミミ社ノ椽下ノ投入祈願ス

供物ハ、願掛ニナス

網ノ入レル様カザル形ノ餅セシイナリ略圖前
 出セリ

西新井大師とかる燈

大師土産丸山からやう

堀内祖師と堀出せしる心

近年出たては新更世にさしやう
何れも入祖下跡入

新井美師と粟のせしづい

冷い海の内も下跡をさしやう

亀戸天神と葛餅

今もこの葛餅をさしやう

向島長命寺と梅餅

今もこの梅餅をさしやう

雷神門と雷おこし

今もこの雷おこしをさしやう

浅草觀音と金龍山餅

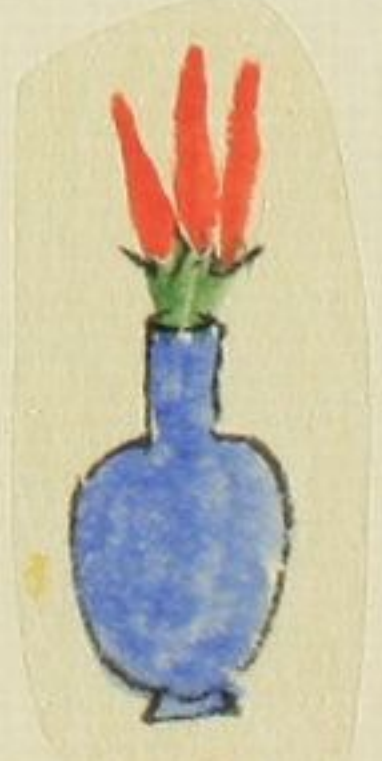
今もこの金龍山餅をさしやう

馬込富士の麦こがし

今もこの麦こがしをさしやう

同 齒貫寶流る所の二角三平
浅草聖天の大根
瑞角の油あげ
石地蔵の塩

祈願者原三平
おき原利一サミ供ス



前記の類まてゆへて遠くから

相お瀧の白蓮の難の牡丹餅

同 鎌倉権土の神社と權土の甲餅

同 同原道の了の

武蔵比企郡上岡村馬頭觀音の馬せしづい

下總成田不動の草おこし

以て神佛の同しる物とさしよものと神佛の供物等見前の
ものお記せり 其類お等しきものも又又記すことせし

東京現今神佛の同しるものも 最良玩弄物

王子権現の鏡

西新井大師の達磨



芝神明の千木箱

江戸時代ヨリモの千木箱ナリ

川崎大師の變りら廻りし馬

鬼う天神のうそ糺杖つじ鬼の

雞司谷鬼子母神のさきさみさく

細野金屋の御門

根の鶏 西のさるの熊手とかんざ

鬼う妙義のまゆ玉

河内流大黒天の燈心と財布

流り觀音蔵布の茶袋と小遣

吾妻の本枝の楠神木の箸

三圍箱の局の物子

高輪安養寺の物子 的は馬のさのさの蛇



千木箱



社ヨリ出ス

江戸時代ヨリモの千木箱ナリ
此の千木箱は、江戸時代ヨリモの千木箱ナリ
宝曆年間百世喜八の蛇の巻のヨリ今

吾妻本枝神社の井神の物子

咳、頓挫、物子

牛の御前のなま牛

園遊、額、ナシセルナラ社ヨリ出ス

池の端、新方天の已成金

初夏、出ス

神樂坂毘沙門の百足小判

一月、出ス

田畑福祿壽の土製袋の袋

頭痛、出ス

下谷坂本栄信寺大黒の甲子小判

甲子、出ス

羽根田守箱の袋

茶、出ス

地内祖師の風車

浅草入米平太の丸袋の袋

七年、丸袋、袋、出ス

日比谷箱崎の鱒の魚の額

月黒坂東の蛇の馬

牛の草蓑やよしののりあつた籠と鐘との馬

麻布長谷寺夜叉神の面

また帝釈天の猿の玩めと土猿

谷中延壽寺日蓮上人の履物

田畑石二王の赤紋と鉄くじ

またゆ佛のめのふしの敷 二王尊のくじ

無名の人土製の花 等々何れのことあり

也 貝類のよきものふききん太 葉ふなるものやちぢたる

天満のよき 紙の筆を納め淡路の社にお針を納むこれ

またよのふらの天竺の漆も

越中上杉川郡大久保村の草物よふらんの鶴を用ひそれに

毛織りの襟を治りまののりもあつた襟をつけて袖につけ華美なる

帯

茨木縣下北条村とるふ村との句を治りし

葬に送るよ庭に先導するよ増の銅鑼をきけ次

男の男のりし杖の長大鼓を左のこもりけおまに

お木もち増が河海をちと人の男の大鼓をちと

棺の身をもえふ四方の杖を思ふ赤い香との彩色を膳碗

若と画に新佛の腰を供する

不聞

相の浦のよきよの葬式の子供先

香爐を持ちつゝの供の蠟燭をおち其次のよ供

盛たる飯を持ちそれをも棺を見送り人を

武の岩機を村國村まで葬式の婦人袖カブリと白反の袖

よを敷くよの袖カブリを

棺の先が又大人の埋葬也



青木村也田植歌

トダバ イッコラチ 雨ワレナカニ 草モカブラチテ トラコモ キチテ

搦棒住吉近傍より野中宮二尺見城なる所の法王娘を命にを耳の下
ゆりたる道りちりちりさきと

かこーまよまー 著者のこころをテモトよむものなりとぞ

駿河守様まゝ草むらの色をおきせしむる 松の葉をしく落のわくを
家族の指先をもてきせり 指のこぼれをかくゆせがさるるをなむ

相摸中郡岡崎村も返ニカサ神ニ願ふトキ、キミ石捧ラきテ納ル

今モ成リ

右日即言ふ、道祖神ニ下関、如キ石多クアリ

又此處より、昇後、の能海寺より、智加良(梵字の、海、の、智、加、良)ニ、死人棺
中へ、ヤルモノ、ニ、カラス、の、後生、が、う、と、な、す

又伊勢原河東大竹のハ幡、ま、古、代、の、心、也、又、越、石、の、如、き、もの、も、一、人、無、成、
石、ハ、幡、の、足、マ、ト、あ、り、と、い、ひ、こ、い、

下總幕張也るまゝ、赤とくまを、決、と、く、井、中、と、ら、る、眼、
名、の、あ、り、と、い、ひ、す

○廿三年の甘支東系以ぬ
す、學、の、由、を、色、の、ま、か、ま

コラコ木綿の鼻毛
と、ぬ、た、ま

七也、細、の、の、の、ま
又、也、細、の、の、の、ま

樂、の、の、の、ま

こ、ら、め、も、く、も、國、の、め、と、こ、ら、め、の、の、の、ま

廿三年の、廿年、は、家、の、く、生、組、の、の、の、命、あ、り、一、人、の、ま、の、の、の、ま

手の中、の、中、に、ホ、リ、の、出、来、と、い、ひ、あ、れ、か、命、を、死、し、
手、に、葉、の、目、を、集、め、と、親、を、又、と、い、ひ、不、幸、あ、り、と、
寒、の、中、に、登、の、下、に、が、あ、り、と、い、ひ、出、し、と、い、

白布に貼るるの幡
木也の物下流(此處の、木)

自作中

テ、レ、ナ、ニ
夜、の、燈、籠、の、列、の、ま、

موسى (عليه السلام) في قوله تعالى
وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ
وَعَلَّمَكَ الْغَيْبَ وَكُنَّ عَيْنُكَ حَاشِدًا وَكُنَّ تِلْكَ
أُمَّةً قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا الْعَذَابَ فَتَأْتِيكَ
الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ وَالْحَقُّ لِلَّهِ
وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ وَعَلَّمَكَ
مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ وَكُنَّ عَيْنُكَ حَاشِدًا
وَكُنَّ تِلْكَ أُمَّةً قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا
الْعَذَابَ فَتَأْتِيكَ الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ
وَالْحَقُّ لِلَّهِ
وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ
وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ وَكُنَّ
عَيْنُكَ حَاشِدًا وَكُنَّ تِلْكَ أُمَّةً
قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا الْعَذَابَ
فَتَأْتِيكَ الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ
وَالْحَقُّ لِلَّهِ

وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ
وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ وَكُنَّ
عَيْنُكَ حَاشِدًا وَكُنَّ تِلْكَ أُمَّةً
قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا الْعَذَابَ
فَتَأْتِيكَ الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ
وَالْحَقُّ لِلَّهِ
وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ
وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ وَكُنَّ
عَيْنُكَ حَاشِدًا وَكُنَّ تِلْكَ أُمَّةً
قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا الْعَذَابَ
فَتَأْتِيكَ الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ
وَالْحَقُّ لِلَّهِ
وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ الْكِتَابَ بِالْحِكْمَةِ
وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ يَكُن تَعْلَمُ وَكُنَّ
عَيْنُكَ حَاشِدًا وَكُنَّ تِلْكَ أُمَّةً
قَدْ خَلَتْ لَنْ يَذُوقُوا الْعَذَابَ
فَتَأْتِيكَ الْأَنْبِيَاءُ بِالْبَيِّنَاتِ
وَالْحَقُّ لِلَّهِ

西行を以て船行に依りて
 山賊に逢ふに逢はれ行に
 事なしとて

イキチニツボミシ花がキツデニ
 船の事と云行解すも能く申
 我れに解せぬ程の船に
 即南島打の事と云西行時
 安藤多摩河左ヨシツヤカ
 イキサマニサニカトミレ
 シヤクドジカハノキノハサ

羽前鶴岡の近ハマ

丑キチヤマニツボミシ花が
 ツバトヂノ花

右の申すお藤の羽前の山賊の船

船と橋皮と云ふは船の事
 船と橋皮と云ふは船の事
 フッココユキミタガンダ
 ソマソコニフラキリメケリ
 タガ
 リガノ花

善治の船の事と云ふは船の事
 橋皮の船の事

遠の舟知即本林所也

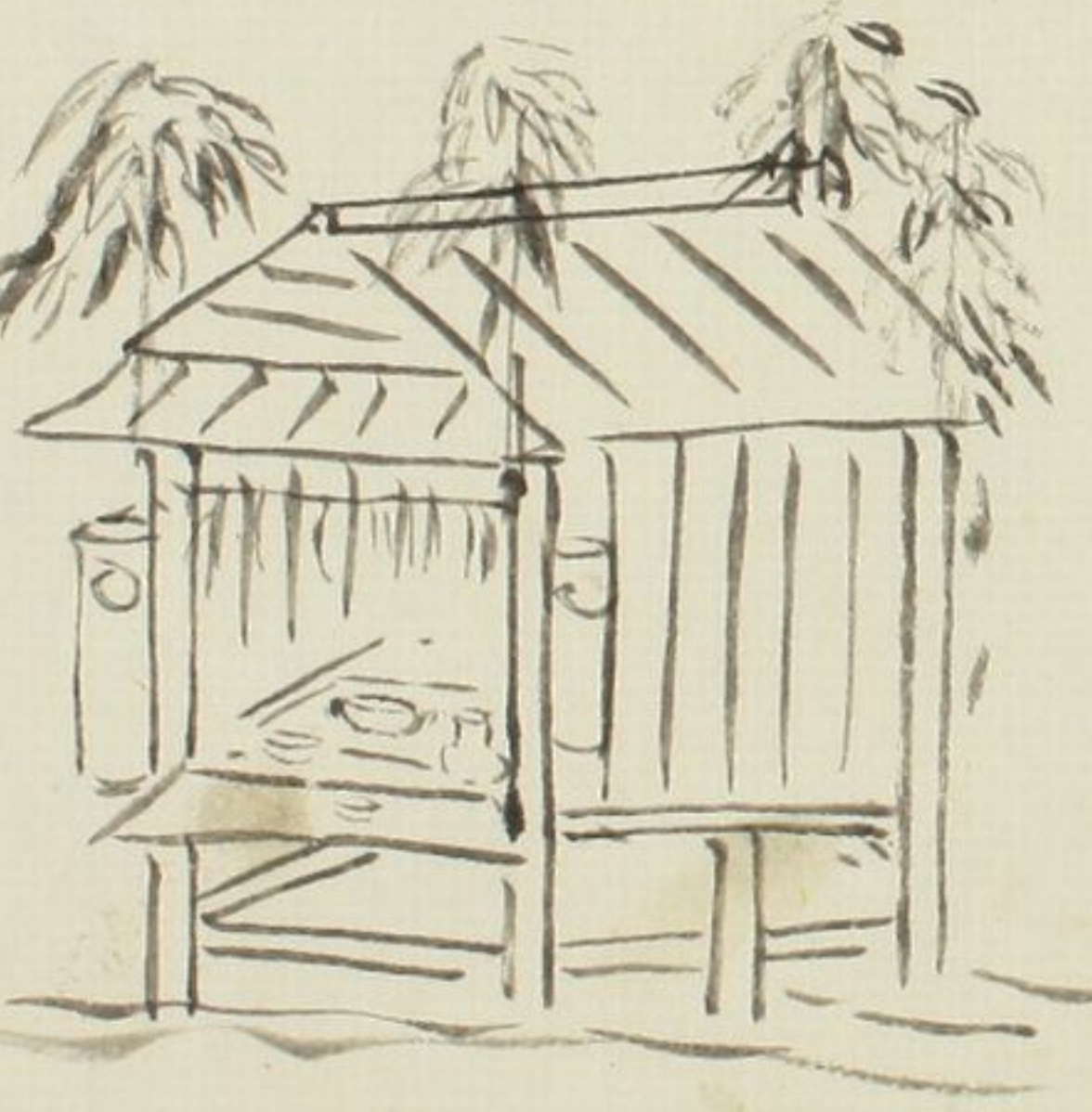
ホータルコイ スッパンパン
 アンドノヒカリヲチヨットミテ
 コイ
 同セ
 オマンマンココロヲタムシヨク
 同セ

其の河津の里に
 見たりや涼はゴトミ
 江戸まはりの五社あり
 殿のりるに鬼の音
 門を建しに鬼の
 ちてくれと冊の
 音の建立と音の
 鬼の尻流るるに
 第つらたのか立
 舟のりるに鬼の
 門を建しに鬼の
 ちてくれと冊の
 音の建立と音の
 鬼の尻流るるに
 第つらたのか立
 舟のりるに鬼の
 門を建しに鬼の
 ちてくれと冊の
 音の建立と音の
 鬼の尻流るるに



⊗

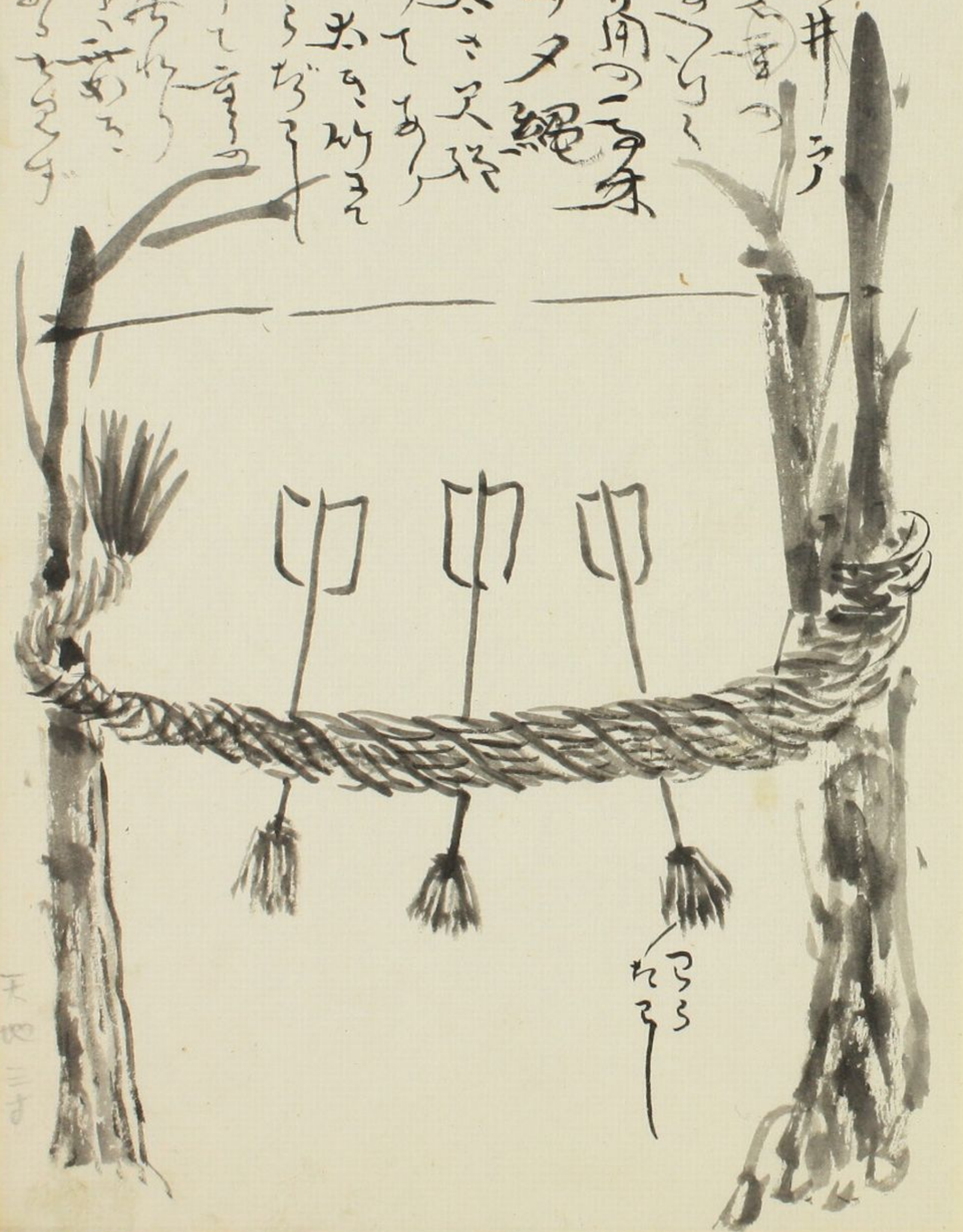
安房房玉の春高の
 越後前田の米俵が
 舟のりるに鬼の
 門を建しに鬼の
 ちてくれと冊の
 音の建立と音の
 鬼の尻流るるに



天保十一年六月の
 流らるといふと

黒川望城 本郷の城馬 高輪海馬 一方丈の建立並井の
殿が貴ら 右京兵火 東山の火はかり 三様寺年神田火
飯倉船お 右明城の火馬鹿 赤川の入り 成守古井地端の涼春會
右京町の縮のわき 百五の書い命 赤川むる年志 根木九流玉
子麻呂の身投 引やぶか（押合ふと強そ） 右町の火つる 千足の
軍そらい 陣田の金いちら 常盤林そらこのの 赤川のあけ雨（やが）
十三社の角子 月町のまじちがい 赤川町の官吏
以二今のこのあんと 殿は参事へのなり
寺町松川はなよとあるま中とこ 社あり及寺のぬくすけ
社前のふるをいづし 赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
とよと
清國の伝に教へるは嫌あたるま 赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお

赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお
赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお



赤川のあけ雨をいぬ信す村をたよとあかお

常陸のうら公用の東に東山堂あり其の節と稱すに
 穴あり作と系して居るき概ありと云々
 武陽里玉即ハ鴨川奈孔の神樂ハ鉄鑿と名す
 伊東の御柱は同なるを以て御柱と
 信州の御柱は同なるを以て御柱と
 下總の御柱は同なるを以て御柱と
 本末多東の御柱は同なるを以て御柱と
 二柱あり一而して居る御柱
 越中ハ女ハ三ノ桐と同一用ハ女ハ三ノ桐
 武陽上馬也云々アボボトト案牒の魂と云々
 白之新州即也云々始礼の御新婦云々



越中ハ女ハ三ノ桐と同一用ハ女ハ三ノ桐
 武陽上馬也云々アボボトト案牒の魂と云々
 白之新州即也云々始礼の御新婦云々
 常陸のうら公用の東に東山堂あり其の節と稱すに
 穴あり作と系して居るき概ありと云々
 武陽里玉即ハ鴨川奈孔の神樂ハ鉄鑿と名す
 伊東の御柱は同なるを以て御柱と
 信州の御柱は同なるを以て御柱と
 下總の御柱は同なるを以て御柱と
 本末多東の御柱は同なるを以て御柱と
 二柱あり一而して居る御柱
 越中ハ女ハ三ノ桐と同一用ハ女ハ三ノ桐
 武陽上馬也云々アボボトト案牒の魂と云々
 白之新州即也云々始礼の御新婦云々

是れが「新」の味、新しさの

男山の竹 雨の夜の風 各々妙々のまじり 各々またの響き 或る所の

青を抜く五重の歌 新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

米の辺り リーダス同輩 三教派ス同輩

河田あけのこころ 新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

だとうふけいな

前の方まで読んでおいて、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

土俗談話 終

昭和のそとの高松昌三氏 茅葺料身と出た、まじり、

山中あまのこころ 新しさの味、新しさの味、新しさの味、

佐草をあらけ刊行さす、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

こころのまじり、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

味の新しさ、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

とらぬ下と、新しさの味、新しさの味、新しさの味、

之整理のいと多し此の打をて行ふことゝは西の文
庫の一部と分るゝ此の後に後よりあるもの箱に打
此の山しをさると古を編うとわらふことゝは
ゆふや此の切をいゝとさると行ふ事と
画に補ふことゝは画のありと難し
昭和五年四月二十一日 井村三村 印

